みんなの童話

たっくんのうそ

へやのすみに昨日着たいそうふくが、丸めておいてありました。

次の日の朝になりました。

「たくまー、学校におくれるわよ」

お母さんは、おこっているとたくまとよびます。

「わかっているよー」

たっくんは、たんすの引き出しのおくまで手を入れて、たいそうふくをさがしました。

「おかしいな。たいそうふくは、二枚あったはずなんだけどな」

たっくんは、へやのすみに丸めてあるのに気がつきました。

「もう一枚は、ナップサックの中か。あらってないや」

「なにしてるの。早くしなさいよ」

お母さんは、声がとがっている。

「お母さん、おこってるな」

たっくんは、朝ごはんをいそいでたべました。げんかんに行くと、くつが八の字にころがっています。

「もぉ、ちこくしそうなのに。お母さんなんでそろえてくれないんだよ」

「たくまー、なにかいったー」

キッチンからお母さんの声がきこえました。

「なんでもない」

走って学校につくと、一時間目はたいいくでした。たっくんは、ナップサックからこっそりとたいそうふくをだしました。くしゃくしゃです。

「たくまくん、たいそうふくをあらってないの」

あいちゃんがききました。たっくんは、あいちゃんのことが大好きでした。

（一番見られたくない子に見られちゃったな）

「お母さんがかぜをひいてねてるから、あらってもらえないんだ」

たっくんは、うそをついたことで、むねがきゅーんといたくなりました。でも、せんたくしてもらえない本当のことはいえません。

「お母さん、ひどいの?」

「うん、でももうだいじょうぶだよ」

「おだいじにね」

「ありがとう」

家にかえると、ぬいだくつをそろえ、たいそうふくをせんたっきに入れました。

夕方、電話がかかってきました。お母さんは、だれかと長話をしています。

たっくんのおなかがなりました。

「おなかがすいたな」

たっくんは、一階に下りていきました。キッチンにお母さんはいませんでした。

「お母さん、どこにいるの」

「ここよ」

お母さんの声は、居間からきこえてきました。

「お母さん、どうしたの」

お母さんは、ふとんをしいていました。

「あら、かぜをひいてねてるのよ。たくまがあいちゃんにいったとおりよ」

「えっ、じゃごはんは?」

たっくんは、おなかに手をあてながらいいました。

「もちろん、作れないわよ」

「はぁー。お母さん、うそついてごめんなさい」

ピンポン、ピンポン

インターホンがなりました。

たっくんが、ドアをあけると、あいちゃんが立っていました。

「はい、のりまきとたまごやき。たくまくん、好きでしょ?」

「うん、ありがとう。でも、どうして作ったの」

「たくまくんが、お母さんがびょうきだっていってたからよ。でも、うそだったみたいね。夕方、お母さんが電話したのよ」

「あいちゃん、うそついてごめん」

「いいよ。もうそつかないでね」

たっくんは、スキップしてかえるあいちゃんを、いつまでもみおくっていました。

しろやま会員　木村　久世